

# 四国霊場第五十二番札所太山寺の彫刻・書画・工芸品

## —四国霊場開創 1200 年記念「空海の足音 四国へんろ展」の調査から—

Sculptures, paintings and calligraphic work, and artwork of Temple 52, Taisanji – An investigation into the “Kūkai no Ashioto - Shikoku Henro Exhibition” commemorating the 1200th year of the founding of the Shikoku pilgrimage

長井 健、石岡ひとみ（愛媛県美術館学芸員）

Takeshi NAGAI, Hitomi ISHIOKA ,

Curators, The Museum of Art,Ehime

In order to commemorate the 1200th year of the founding of the Shikoku pilgrimage public museums and art galleries from the four prefectures in Shikoku came together this year (2014) to hold the “Kūkai no Ashioto – Shikoku Henro Exhibition.” Previously many cultural properties focusing on sacred sites in Ehime prefecture have been introduced at The Museum of Art,Ehime, but in preparation for the opening of this larger event, a comprehensive investigation at Temple 52, Taisanji was carried out for about one year from June 2013 by then Assistant Professor Hikaru EBESU of the Faculty of Letters at Ehime University and a group of students from the Japanese History Research Lab of the same school. As a result, a staggering number of about 17,000 items including approximately 400 pieces of artwork, paintings and calligraphic works and sculptures, including items not previously put on display as well as new ones, and a large number of religious texts and documents could be catalogued. In this paper, we would like to report on materials that are worth special mentioning and were put on display at the exhibition. For example, among the sculptures there were two Joshin zazo (sitting statues of Goddesses), a Gochi Nyorai zazo (sitting statue of the five Buddhas) and so on. As well, other than the previously-known seven standing statues of Juichimen Kannon Bosatsu (Special Cultural Treasures) that were placed in the Main hall other examples made between the mid to late Heian period (794-1185) were newly confirmed. Among the paintings there were the rare standard works from this region such as “Juroku Rakan Zu” and “Amida no Honji” both from the Muromachi period (1336-1573). As well, similar to the “Kannon/Monju/ Fugenzo” by Yasunobu KANO from the Edo period many items donated from people in the Matsuyama domain and Mitsuhamama district were confirmed. Among the artwork, there were such items as “Jitsugetsurei” and “Nyoi” and other not previously discovered Buddhist artwork from the Middle Ages. There is a possibility that the large blue and white ceramic flower vase was created in the Tobe or Kutani areas during the Bakumatsu period (1853-1868), and is an important item in the history of clay in Ehime. Through this investigation we could discover important cultural properties that demonstrate the high rank of the temple Taisanji and its culture and history. In the future, we would like to continue a detailed and comparative investigation into each item and further heighten the significance of such items.

### はじめに

平成 26 年(2014)が四国霊場開創 1200 年とされることを記念し、四国 4 県の公立博物館・美術館が連携して、企画展「空海の足音 四国へんろ展」を開催した。愛媛県美術館においても、愛媛県内の札所を中心に多くの文化財を紹介したが、その開催に向けての準備の中で、第五十二番札所太山寺（松山市）については、平成 25 年（2013）6 月より約 1 年間にわたり、愛媛大学法文学部の胡光准教授（当時）及び同学部日本史研究室の学生たちと調査団を結成し、その他、外部の専門家のご協力を仰ぐ形で、総合調査を行った。

太山寺では、これまで単発的な調査は行われてきたものの、ここまでの大規模の悉皆的調査は実施されたことがなかった。本堂（国宝、鎌倉時代・嘉元 3 年 [1305] 建立）や仁王門（重要文化財、鎌倉時代）などの建造物は、

中世以降火災等の大きな被害を受けなかつたことを証明しており、本堂安置の十一面觀音立像群（重要文化財、平安時代）や四国最古の弘法大師画像（愛媛県指定文化財、鎌倉時代）、江戸時代の札挟み・納札（松山市指定文化財）など、優れた文化財も従来知られている。それゆえ、調査前より、古い文化財が少なからず見出されることはある程度予想はしていたが、調査の結果、その予想をはるかに上回る美術品や歴史資料、古文書が多数確認された。1年ほどの調査期間で把握できたのは、彫刻・書画・工芸品（金工・陶磁器など）が約400件、聖教・文書類に至っては約17,000件という膨大なものである。展覧会では、特に歴史的・美術的に価値の高い約20件を選びすぐつて紹介したが、本稿では、展覧会出品作品を中心に、特筆すべき資料について報告したい。

## 1 彫 刻

彫刻作品においては、従来その存在は知られながらも、詳細な調査が行われてこなかつたために、制作年代の判明しなかつたものが多かつたが、今回の調査により、平安時代の作と判明した像が数点見出された。

従来、太山寺の最も著名な彫刻作品としては、本堂内陣厨子に安置される計7軀の十一面觀音立像（全て重要文化財）がある。いずれも一木造による、像高150cm前後、控えめな肉取り、浅めの衣文彫出による均整のとれた像容であり、平安後期の温和な様式を示している。等身の十一面觀音像が揃つて7軀も伝えられる例は他になく、特別な造像の背景と、当時の觀音信仰の高まりがうかがえる貴重な一群である。

今回確認された像はいずれも、十一面觀音群をさかのぼる11世紀後半から同時代の12世紀後半にかけての作と判断され、寺としての体制が概ねこの頃に整えられたと考えられる上で、重要な存在である。以下、各像の詳細を簡単に述べる。

境内の長者堂に安置される像高30cmあまりの2軀の一木造の女神坐像（写真1-1・2）は、それぞれ寺の開基とされている豊後国（大分県）臼杵の炭焼長者、眞野長者の夫人・玉津姫及び娘・般若姫の像と伝わる。玉津姫像は、損傷を受け表面が磨滅しており、容貌などはうかがえないが、片膝を立てて半跏坐した姿勢、背に流した髪や胸部のふくらみなどが分かる。一方の般若姫像は、目を閉じ、拱手して正座する姿で、量感のある造形や端正で温和な表情など品格ある作風を示している。もとは寺の鎮守的な像として造立されたものであろうか。作風や大きさの違いから、当初は別々に制作されたものだろうが、11世紀半ばから12世紀の作と見られ、伊予地方における平安期の神像彫刻としても基準的作例と言える重要な発見である。

現在、本堂内陣の十一面觀音立像群を安置する厨子が置かれた須弥壇の裏側には五智如來坐像（写真1-3）が安置される。中尊の大日如來は像高118cm、他の4軀は像高90cm前後。いずれも穏やかな表情と造形感覚は平安後期の典型的な特徴を示している。定朝様の非常に洗練された作風から、中央での作と推測される。五智如來は、密教における五つの智を『金剛頂經』に説く五仏に当てはめたもので、金剛界曼荼羅では、中心となる根本成身会に表わされるが、五智如來のみで独立して表される例は少なく、わが国では彫像としていくつか残されている。特に平安時代まで遡るものは、京都・安祥寺像、奈良・大日寺像、岡山・遍明院像（いずれも重要文化財）などわずかで、太山寺像もそれに並ぶきわめて重要な作例として位置づけられる。

その他にも、本堂安置の不動明王坐像（像高103cm）、仁王門安置の金剛力士立像2軀（像高各261cm）など、寺内で平安後期の作と見られる像が幾例か見出された。現在の本堂は、地盤に二度火災を受けた痕跡があることから、前身建築の存在が知られるが、これら一連の彫刻群は、現本堂建立以前の平安期の伽藍の時代に前後して制作されたものと考えられ、この時期の寺の相当な隆盛をしのばせる。

## 2 書 画

書画類は約250件が確認された。大半は江戸後期以降のもので、檀家や地元で所蔵されていたと思しき文人画等や結願した遍路からの寄進であろう御影・朱印納経が多く見受けられたが、中には中世に遡る仏画や松山藩主からの寄進等、寺の歴史的背景を考える上で重要な作品も少なくなかった。

最も古いものでは、「隅寺心経」と呼ばれる奈良時代の般若心経が挙げられる（写真2-1）。隅寺心経は、平城京の藤原不比等邸（現法華寺）の東北隅にあったことから「隅寺」と呼ばれた海龍王寺に伝わっていた一群の総称で、空海がここで毎日百巻ずつ計千巻を書写したことから、空海筆の伝承を持つが、実際は、書風や料紙の風合いから、それより古い天平年間（729-749）から天平宝字年間（757-765）頃にかけ

書写されたものと見られる。現在、巻間に多数が伝存しているが、初公開となる本巻もその一つ。明治期に名古屋より太山寺へ入山した宮崎智全が自ら表装裏に記した由来記によれば、本巻はもともと愛知の津島牛頭天王社（現津島神社）に伝来していたが、明治初の神仏分離により神宮寺の一つであった宝寿院に移されたものを、同院の覚如が自身の法兄であった縁で譲り受け、当寺へ持参したものという。

仏画では、《釈迦三尊十六善神像》（写真 2-2／南北朝時代）、《十六羅漢図》（写真 2-3／室町時代）、《三社神影図》（写真 2-4／室町・桃山時代）が特筆される。前二者は経年の傷みが惜しまれるが、伊予地方には類例のない正統派の仏画として注目すべきものである。《三社神影図》は、鹿（春日）・天神・僧形八幡と思しき三神の珍しい組み合わせのもので、伝来は不明であるが、神仏分離の打撃を少なからず受けた四国靈場における、神仏習合の時代の貴重な遺産と言える。

仏画以外で注目されるものとしては、まず《阿弥陀の本地》（写真 2-5）が挙げられる。現在は二曲一双屏風に4図が貼り付けられているが、本来は1巻もしくは複数巻の絵巻物であったものと思われる。阿弥陀如来の前世（人間時代）を中心とした流離譚であるこの物語は、お伽草子のうち「本地物」に分類され、物語成立は室町後期と見られるが、近世には説教節や古浄瑠璃としても広く享受されたようで、多くの諸本が伝存している。絵画化されたものとしては、江戸初期の奈良絵本や絵入り版本などがあるが、絵巻形式では慶應義塾図書館蔵の三巻本がやはり江戸初期の作として知られるくらいである。本作品は、作風的には室町後期にまでさかのぼると見てよく、物語成立から程ない時期の絵画化作品として非常に貴重である。

狩野安信《観音・文殊・普賢図》（写真 2-6）は、箱底に「瑞龍院殿ヨリ御寄附 狩野永眞筆 三幅 太山寺什宝」の墨書があり、松山藩第九代藩主の松平定国（1757-1804）が寄進したものであることを伝えている。今回の調査においては、松山藩との関係を示す文書類が多く見いだされ、江戸期における藩の太山寺への保護の様子が判明したが、本作品はさらに「モノ」の立場からそれを裏付ける重要な資料と言える。伊予地方にはほとんど伝来しない典型的な江戸狩野の作例としても重要である。

### 3 佛教工芸品

本坊・客殿における工芸品の調査資料は、約 150 件を数えた。佛教工芸品では、中世に遡る密教法具が見つかった。

《五鈷杵》は金銅製で、室町時代のものである。《日月鈴》（写真 3-1）は金銅製で鈷部に月と日を象ったもので、他に類例を見ない特異なものである。鈴部がとりかえられ、把部に鉢留めされ、鈴身部は室町時代、鈷部は鎌倉時代と考えられており、制作年代が異なる。《如意》（写真 3-2）は、如意頭の部分が大型の鼈甲製で、表面に金銅製の羯磨文や三鈷杵、宝珠文を貼り付け、金銅製の覆輪を付けている。室町時代に制作されたと考えられ、江戸時代に修理が行われている。下部には取り外し可能な唐木製の柄がつく。これらは太山寺の宝物公開の古写真の中にも「弘法大師御所持日月鈴」、「請來品」などの題箋がつけられており、太山寺では、弘法大師空海にちなむ寺宝として重要視されていたことがわかる。

《戒体箱・香呂箱・居箱》（写真 3-3）は木芯金銅張りで、香呂箱と居箱の側面に「奉寄進密箱 / 豊州松山住 / 諸願成就所 / 施主等敬白」「太山寺不出 / 諸願成就所 / 寛文三癸卯曆 / 九月吉祥日」と刻まれている。外箱にも墨で寛文 3 年（1663）9 月の年号がある。これらは密教の儀式である灌頂に使用するもので、太山寺の寺格の高さを示す。太山寺の古写真に、戒体箱を所持する人々の集合写真（写真 3-4）がある。

《香象》（写真 3-5）は木製で彩色された象形の香炉である。背中に灰置がある。これは灌頂式に使用するもので、箱書には表に「香象」、裏に「元文四未歳三月吉祥日 現住法印快秀灌頂砌整焉」と書かれ、太山寺住職快秀が元文 4 年（1739）の灌頂のために整えたことがわかる。

### 4 陶磁器

陶磁器では、茶陶がみられる。《天目茶碗》（写真 4-1）は内外面に鉄釉と灰釉が混淆した斑釉が掛けられ、明褐色が底部近くで輪状に巡り、星が一つみられる。胎土は白褐色で、高台は無釉で露胎、内部には削りがみられる。口縁端部には銀の覆輪が付く。江戸時代の岐阜県・美濃産である。見込みには長年の使用痕がみられ、太山寺で重宝されていたことがうかがえる。《萩茶碗》は口縁端部が外方に大きく開く大ぶりの茶碗である。白釉がたっぷり掛けられ、貫入が多い。高台は四方の切り込みがあり十字形を呈し無釉である。江

戸時代の山口・萩産である。箱に「古蘿茶碗」と書かれている。《染付茶入》(写真 4-2)は、外面には祥瑞文で十字繋ぎ紋とよろけ縞を割り付け、十六花弁の菊花文と六花弁の花文を中心に配す。高台内に染付で角銘が描かれている。高台疊付に砂が付着している。象牙製の蓋、錦の仕覆を伴う。佐賀県・有田産の 1630 ~ 40 年の初期伊万里と考えられる。

本坊に伝わった《染付窓絵大花瓶》(写真 4-3)は、高さ 80 cm 近い大型の磁器製の一対の花瓶である。口縁は四稜の稜花形で、染付で頸部と胴部に花頭窓を描く。本来は花鳥や植物などを赤や黄色、緑色などの上絵装飾がされる海外輸出用の大花瓶である。花瓶に使用された顔料から、生産年代は江戸時代末期から明治時代初期が想定できる。製作技法などから、肥前や瀬戸美濃とは異なり、砥部産の可能性がある。砥部は江戸時代には大洲藩領に属する陶磁器窯で、安永 4 年 (1775) に磁器を焼成開始、同 6 年 (1777) に伊予国で初めて磁器焼成に成功し、幕末にかけて主に碗・皿・鉢などの日常食器を中心に入生産した。

類例調査により松山市窟野に所在する真言宗圓福寺にも太山寺と同じタイプの染付大花瓶が所蔵されていることが判明した。さらにこの大花瓶は、松山・久谷窯で焼成された可能性がある。久谷窯は江戸時代、松山藩領に属し、近世後期から明治初期にかけて、砥部と同様の磁器製品を焼成した窯で、久谷窯も砥部焼の範疇に入る。

寺院では大型の花瓶が数多く使用されているが、金属製も多く、近代以前のやきものの大型の花瓶一対が現存すること自体が大変珍しい。本作は幕末期に砥部・久谷で焼成された可能性があり、愛媛の陶磁史を考える上でも重要な資料である。幕末期に砥部において大型の磁器製花瓶を焼成できたことが注目される。

太山寺本堂や御堂の中に、戦時中に生産されたやきものの香炉、華瓶 (写真 4-4) を発見した。第二次大戦の戦時体制における物資統制のため、生産が制限されたなかで限られた窯で作られたやきものである。これらは、「統制陶器」と名付けている。現在の研究では、昭和 16 年 (1941) から 21 年まで生産されたものと考えられている。戦時中の金属供出のため、寺院にある金属製の仏具は陶磁器やコンクリート製の仏具と交換された。鉄釉や黒釉の香炉、華瓶、蠟燭立が作られ、大きさは 3 種類ほどあった。太山寺では三重県万古焼、岐阜県美濃焼が見られる。地元の窯業である砥部でも戦時中に仏具を生産していたが太山寺ではそれを使用せずに、他産地のものを使用している。陶磁器製の仏具は長い年月で破損し、廃棄されることが多く、愛媛では実態が不明なため、今回の発見は貴重な作例である。

愛媛県中予地方の寺院から供出された金属製の仏具類を集めて記念撮影した古写真が見つかった (写真 4-5)。写真の隅に昭和 19 年 (1944) 5 月 4 日と書かれている。棚の端には「大東亜戦争 佛具供出紀念 西温各寺」の札が掛けられ、愛媛県西温泉郡地域の寺院から集められたことがわかる。仏具には供出された各寺院の札が付けられている。この写真は、戦時中における松山市内の寺院の金属供出の実態を物語る貴重な写真資料といえる。

## おわりに

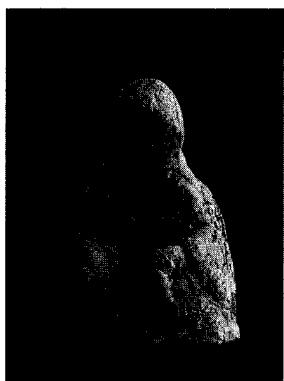
今回の調査により、彫刻、書画、工芸品等が約 400 件発見された。太山寺の歴史や文化、太山寺の寺格の高さを示す貴重な彫刻・書画・工芸品などの文化財を見出すことができた。

今後、愛媛大学日本史研究室で調査を進めている太山寺の文書調査の成果との照合により、数々の宝物の来歴や由緒なども明らかになるのではないかと期待している。今回は概要調査のため、今後、個々について詳細調査及び比較調査を進めて、さらに資料的価値を高めていきたい。

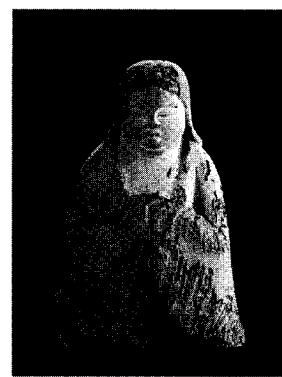
調査や展覧会出品に際し、ご快諾いただきました、太山寺の吉川俊宏住職様に感謝申し上げます。

## 【付 記】

調査にあたっては、愛媛大学法文学部胡光教授及び同学部日本史研究室の皆様をはじめ、円明院住職武田和昭氏 (彫刻・書画)、青山学院大学文学部浅井和春教授 (彫刻)、奈良大学文学部関根俊一教授 (仏教工芸)、岡山大学文学部佐々木守俊准教授 (彫刻)、佐賀県立九州陶磁文化館前館長大橋康二氏 (陶磁器)、砥部焼同組合理事長山本典男氏 (陶磁器)、愛媛県歴史文化博物館今村賢司学芸員 (歴史資料)、伊方町町見郷土館高嶋賢二学芸員 (彫刻・書画・歴史資料)、町立久万美術館神野祐太学芸員 (彫刻) のご協力・ご教示をいただきました。記して深謝の意を表します。



1-1 女神坐像（伝玉津姫像）



1-2 女神坐像（伝般若姫像）



1-3 五智如来坐像



2-1 般若心経（隅寺心経）



2-2 积迦三尊十六善神像

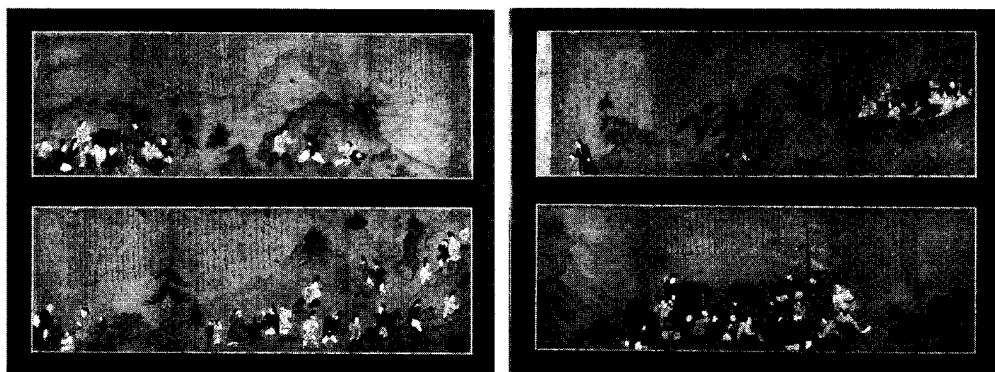


2-3 十六羅漢図





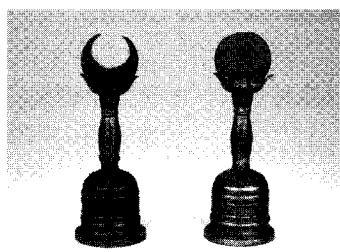
2-4 三社神影図



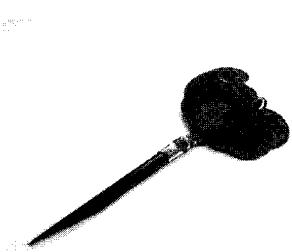
2-5 阿弥陀の本地



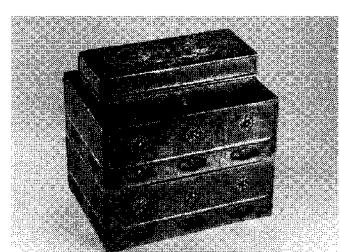
2-6 狩野安信筆 観音・文殊・普賢図



3-1 月日鈴



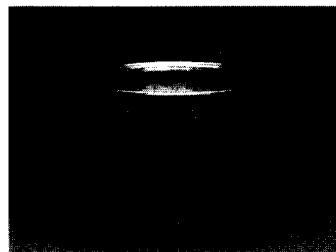
3-2 如意



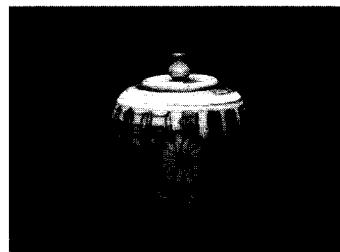
3-3 戒体箱・香呂箱・居箱



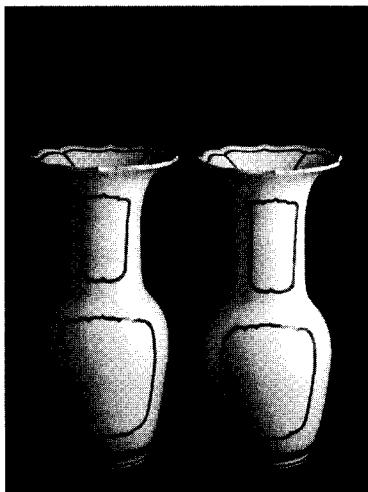
3-5 香象



4-1 天目茶碗



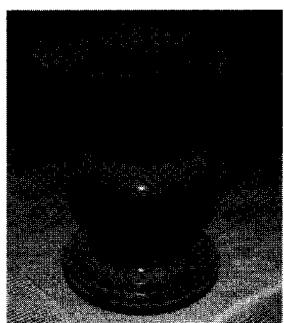
4-2 染付茶入



4-3 染付窓絵大花瓶



3-4 古写真



4-4 鉄釉華瓶



4-5 金属供出写真